

「マルクス主義批判」作法

Ver. 2015-10-22

宮下英明 著



「マルクス主義批判」作法

本書について

本書は、

<http://m-ac.jp/>

のサイトで書き下ろしている『「マルクス主義批判」作法』をPDF文書の形に改めたものです。

文中の青色文字列は、ウェブページへのリンクであることを示しています。

目次

はじめに	1
1 思想 / イデオロギー批判作法	5
1.0 要旨	6
1.1 「批判」の意味	8
1.2 思想批判作法	10
1.3 イデオロギー批判作法	14
1.4 理論批判作法	16
2 「マルクス主義」の捉えの要諦	23
2.1 構造的捉え	24
2.2 理論家は<理論の差別化>で保身	27
2.2 「マルクスの理論」「マルクス者」	28
3 「疎外」	31
3.1 「疎外」	32
3.2 「矛盾・止揚」	34
3.3 「解放」	35
4 「共産主義」	37
4.1 放任主義に対する管理主義	38
4.2 管理主義の含蓄——独善と圧政	39
4.3 意識改革・思想統制	41
5 「革命」	43
5.1 「革命」の意味・含蓄	44
5.2 破滅への道連れ	45
5.3 「修正主義」	47
6 「唯物論」	49
6.0 要旨	50
6.1 「唯物論」の方法論と限界	52

6.2 「市民社会」	53
6.3 「人間の存在」	55
6.4 「言語」	56
6.5 「歴史」(「史的唯物論」)	58
6.6 「科学による哲学の終焉」の標榜	61
7 「マルクス経済学」(『資本論』)	63
7.0 要旨	64
7.1 『資本論』は、商品経済学	66
7.1.1 『資本論』は、商品経済学	67
7.1.2 『資本論』は、「資本論」の表題が拙い	68
7.1.3 『資本論』が共産主義者の経済学になったわけ	69
7.2 『資本論』は、恐慌論が商品経済学	70
7.3 『資本論』は、疎外論	71
7.4 『資本論』は、価値論が唯物論	72
7.5 『資本論』の価値論	75
7.5.1 『資本論』の価値論は、拙論	76
7.5.2 「商品」	77
7.5.3 「価値」	78
7.5.4 「貨幣」	84
7.5.5 「労働」	88
7.5.6 「剰余価値」	92
7.5.7 『資本論』の価値論は、無用	94
おわりに	97

本文イラスト、ページレイアウト、表紙デザイン：著者

はじめに

思想シーンでは、「マルクス主義批判」がいろいろ形を変えつつ現れる。「マルクス主義批判」というと古めかしいテーマに聞こえるが、「いろいろ形を変えつつ」ということで、いまなお現れる。

わたしも、いまなお「マルクス主義批判」をしたくなることがある者である。

「マルクス主義批判」の形態は、人さまざまである。この「さまざま」は、「マルクス主義批判」をつくらうとする動機、思考回路、立場のさまざまである。

わたしが「マルクス主義批判」をつくる時、その理由は、マルクス主義が迷惑な思考様式としてわたしに対してくるからである。

一般に、「批判」は作法を間違えると、生産的でないものになり、そして面倒なものになる。

特に「マルクス主義」はイデオロギーであるので、「批判」は作法を間違えると面倒である。

本論考は、「マルクス主義」批判の作法を述べようとするものである。

「批判」は、批判の視点をどの高さにおくかで、機能性が大きく変わってくる。

マルクス主義と同位対立の視点で「マルクス主義批判」を行えば、「目くそ鼻くそ論争」が必定である。

「マルクス主義批判」は、「批判」というより「解説」になるくらいに、「マルクス主義批判」を高い視点から見下ろすふうにやるのがよい。（実

はじめに

際このとき、わたしの場合だと、マルクス主義に限らない「迷惑な思想」の一般形式が浮かび上がってくる。）

これが、本論考が示そうとする「マルクス主義批判」作法である。

1 思想 / イデオロギー批判作法

1.0 要旨

1.1 「批判」の意味

1.2 思想批判作法

1.3 イデオロギー批判作法

1.4 理論批判作法

1.0 要旨

「批判」は、批判の視点をどの高さにおくかで、機能性が大きく変わってくる。

マルクス主義と同位対立の視点で「マルクス主義批判」を行えば、「目くそ鼻くそ論争」が必定である。

「マルクス主義批判」は、「批判」というより「解説」になるくらいに、「マルクス主義批判」を高い視点から見下ろすふうにやるのがよい。

これが、「マルクス主義批判」の作法である。

この「作法」は、具体的にはどのようなになるか？

例えば、マルクス主義が用いる「諸個人 - 対 - 資本主義的生産様式」の枠組に対し、これに付き合うのは、「目くそ鼻くそ」である。「諸個人 - 対 - 資本主義的生産様式」の枠組は、「個と系 / 場」の視点から見下ろしてやる。

即ち、「諸個人 - 対 - 資本主義的生産様式」だから、「矛盾の止揚」や「諸個人の解放」や「諸個人による生産様式の管理」（「富の再配分」）を言いたくなる。「諸個人が管理できるところまで生産様式を縮小・単純化」（「革命」）を言いたくなる。

しかし、「個と生態系」だったら、「矛盾の止揚」や「個の解放」「個による生態系の管理」を言いたくなるか？「個が管理できるところまで生態系を縮小・単純化」（「革命」）を言いたくなるか？

言いたくはない。

なぜなら、「個と生態系」だと、「個は、支配されていると同時に自由」

があたりまえになるからである。もし「個の解放」「個による生態系の管理」を唱えて「個が管理できるところまで生態系を縮小・単純化」（「革命」）をやれば、それが自殺行為（「自分を生かしているものを殺すことで、自分を殺す」）だということが、容易にわかるからである。

1.1 「批判」の意味

「批判」は、つぎの二通りがある：

- A. 相手と横並びする様で、相手を退けようとする
- B. 相手を俯瞰する様で、相手を定位しようとする

例えば、マルクス主義者の中のイデオロギー対立は、Aである。

本論考の「マルクス主義批判」は、Bである。

Bのスタンスは、「相手を理解」「相手に寄り添う」である。

では、なぜ「理解」と言わずに「批判」と言うか？

「理解」の言い方には、相手を肯定するニュアンスがあるからである。

そこで、相手を否定的に定位することになる「相手を理解」には、「批判」の言い方を用いるふうになっている。

A, B の区別に用いた「横並び」「俯瞰」の意味は？

「横並び」は、「同位対立」のことであり、相手の否定が自分の肯定になり相手の肯定が自分の否定になる位相である。

「俯瞰」は、相手の否定 / 肯定が自分の肯定 / 否定に返らない位相である。

わかりやすい喩えで、この違いを示すとしよう。

相手が「木の幹の色は茶色だ」と言ってきた。

つぎは、Aである：

自分は、「木の幹の色は灰色だ」とする者である。

そこで、「この色は茶色ではなく灰色だ」の論をつくる。

これに対し、つぎはBである：

自分は、「木の幹の色は何々だ」みたいな物言いをする者ではない。
そこで、「相手は「木の幹の色は茶色だ」と唱えているが、これは
はどういうことか」の論をつくる：

「相手は「木の幹の色」の概念を立てるが、これは木の幹の色
がいろいろであること、色が光によって変わることを、知らない
ためである。」

ちなみに、マルクス主義者は、一つのイデオロギーにつく者の癖として、
マルクス主義批判を専らAタイプのものとして受け取る。

そこで、マルクス主義に対するBタイプの批判

「マルクス主義は「木の幹の色は茶色だ」と唱えているが、これ
はどういうことか」

に対しては、つぎの形の論駁をつくる：

「この者は、「木の幹の色」の概念がわかっていない」

たとえば、マルクス主義者がする構造主義批判はこれであって、はなか
らズしているわけである。

1.2 思想批判作法

あなたが、ある思想を批判したくなったとする。

このとき肝心なことは、「思想」というものがわかっていることである。

思想は、似たり寄ったりである。

同じだといってもよい。

思想は、確信犯的に誇張を行う。

均しく目を配るみたいなことをしていたら、「思想」の形にはならないのである。

そこで、違いにこだわり、差別化にいっしょうけんめいになるのは、思想というものがわかっていないということである。

それは、《思想をわかることは自分を埋没させることになるので、差別化を自己目的化している》の体(てい)である。

「マルクス主義批判」を考えるときは、マルクス主義はこんな感じの体勢でつくられている思想だということを、先ず理解してやる必要がある。マルクス主義は、若い思想であり、前のめりの思想であり、既存に対して無理矢理対立軸をつくらうとする思想である。対立軸をつくることを以て自分のアイデンティティを保とうとするタイプの思想である。

マルクス主義には、ヘーゲル・フョイエルバッハ批判がある。

これを行うのは、自分がヘーゲル、フョイエルバッハと同じだからである。

同じなので、自分を立てるために差別化にいっしょうけんめいになる。

先に述べたように、思想は誇張である。

批判されるヘーゲル、フョイエルバッハにしてみれば、「あんたの考えるくらいのことは、とっくに考えているよ」になる。

それから、思想批判は、「思想は独善である」の構えで臨むこと。

思想を紡ぐ者は、その思想を「善い者」がつくる「善い思想」にしている。「盗人にも三分の理」のことわざがあるが、「三分」などとんでもない、盗人は百パーセント自分を「善い者」にし、「善い思想」の実践として盗みを行うのである。

そこで、独善に対してダメ出しするような批判をつくる者は、相手に輪をかけた独善ということになる。

批判は、つぎのことをするものである：

1. 相手の思想の描く<世界>がどんな構造になるものかを示す。
2. この構造の無理(論理矛盾)を示す。
3. 「無理を通す」が招くことになる「害悪」を、論理的に導出する。

作業は、論理計算である。

批判は、論理計算を淡々とやるものである。

相手の思想を批判するのであって、相手を批判するのではない。

特に、相手を指しての「わかっていない」「勉強していない」の言い方は、することではない。

もっとも、批判を商売にしている者の場合は、売れる批判をつくらねばならないから、劇場的な「けんか」仕立てを選ぶふうになっても、それは認めてやる余地がある。

一方、そうでない者は、これを真似る必要はない。

「けがをするぞ」というのではなく（実際けがをすることがあるかも知れないが）、「引っ込みがつかないふうに自分をしてしまうよ」ということである。

間違ったときにあっさり「間違った」と言える者は、強い者である。

弱い者は、引っ込みがつかないように思ってしまい、失敗の糊塗に腐心する者になる。そして、たった1度の人生をずいぶん台無しにしてしまうのである。

ちなみに、今日のネット時代には、匿名で批判するやり方に惹かれるかも知れない。

そしてこの場合は、相手に対する「ばか」呼ばわりもできる。

すすめるわけではないが、「物言わぬは腹ふくるるわざ」のことわざもあるとおり、これは認めてあげたい。

そして最後に、「批判」は、簡明でなければならない。

ぐちゃぐちゃのことばを連ねたのは、思想ではない。

ぐちゃぐちゃのことばを連ねる者は、思想ができていない者であり、思想がわかっていない者である。

思想になっているかどうかは、人に対し簡明になっているかで試される。自分は自分を偽るので、「人に対し」が肝心なところになるのである。

マルクス主義は、ぐちゃぐちゃのことばを連ねる。

これで、自分自身を騙してしまうことになる。

マルクス主義の親のヘーゲルの文体は、論理学がだいぶ整備されたいま

の時代の眼でこれを見れば、ひどいものである。そしてこれで自分を騙してしまう。

実際、この文体が紡いだ例えば歴史哲学だと、実際の歴史に適用したときにトンチンカンな論をつくることになる。

ヘーゲルの子のマルクスだと、『資本論』の「価値」論などは、「ぐちゃぐちゃの体で自分を騙してしまう」の好例である。

そして、このような文体が紡いだ理論を実践に適用すれば、トンチンカンな行動を起こすことになり、悲惨な状況をつくり出してしまうというわけである。

マルクス主義批判は、このぐちゃぐちゃの文体に付き合ってはならない。「批判」は、「思想は簡明でなければならない」の意味で、簡明でなければならない。

1.3 イデオロギー批判作法

「イデオロギー」は、「信念体系」と訳される。

「信念」は、「信仰」と「信」で通じる。

イデオロギーの「信」は、宗教の「信」と同じ「救済」への「信」である。

イデオロギーと宗教の違いは？

救済を行う主体が人間か神かである。

イデオロギーの「信」も、「聖」を立てる。

「救済」の闘いは「聖戦」である：

「起て同胞（はらから）よ 行け闘いに

聖なる血にまみれよ」

（「ワルシャワ労働歌」）

宗教批判は、その宗教に入っている者に対して行うものではない。

同様に、イデオロギー批判は、そのイデオロギーに入っている者に対して行うものではない。

単に、余計なことである。

マルクス主義批判は、自分と同じようにマルクス主義を俯瞰する者たちを受け手として、つくるものである。

つくる目的は何か？

マルクス主義への対応を間違えないようにするためである。

イデオロギーは、独善である。

そしてこの独善が人の意識改革や組織の改変を標榜するものであるとき、それは迷惑なものになる。

マルクス主義は、このようなイデオロギーの典型である。

そして、人の意識改革や組織改変を標榜するイデオロギーは不滅である。したがって、マルクス主義は不滅である。

実際、これとの付き合い方が絶えず問題になってくるわけである。

そこで、これとの付き合い方を心得ておくことが必要になる。

そしてこの心得を論じるとき、それは「マルクス主義批判」の意匠になる。

1.4 理論批判作法

マルクス主義は、科学に立つことを標榜する。

自身の科学的スタンスであるとしているものは、唯物論である。

そして、《唯物論の人への適用は、人を社会から説明するというものである》と進め、さらに《現前の社会を捉える科学はとりわけ経済学である》と進める。

そして、『資本論』となる。

本論考は、マルクス主義に「はた迷惑な思想」の典型 / 普遍型を見て、「はた迷惑な思想」の批判作法としてマルクス主義批判作法を示そうとするものである。

本論考においては、マルクス主義が標榜する「科学」は、「はた迷惑」との関係で見えていくことになる。

そして本論考は、マルクス主義批判の作法として、この見方を示そうとするわけである。

このとき、「批判作法」は「理論批判作法」である。

論の簡単のために、ここでは「理論批判作法」を「『資本論』批判作法」で考える。

まず、用語の概念整理をする。

「科学」「理論」の意味である。

また、「科学」をいえば、これと紙一重のもののように「哲学」を出してくることになるので、加えて「哲学」の意味である。

まず、「哲学」。

「科学哲学」の言い回しがある。この場合「哲学」は、「科学」との同位対立ではなく、「科学」を俯瞰・形式探求する体(てい)で立つ。要するに、「メタ論」である。

「俯瞰・形式探求」は、「哲学」の位相として一般的に言えそうである。

「〇〇哲学」即ち「〇〇の俯瞰・形式探求」、というわけである。

本論子は、この程度の意味で「哲学」のことばを用いていく。

つぎに、「科学」。

現前の「科学」、即ち「科学」を自称しているものを見ると、「科学」は「自分の未だ知らないものを知ろうとする営み」である。

この「科学」には、「記述」物と「理論」物がある。

「記述」は、「見つけたものを書き留める」である。

「理論」は、「見えないものを理で捉える」である。

そこで、「理論」。

「理論」とは何か？——理論であるとなれば、どこで区別される？

この問題は、「見えないものを理で捉える」というときの「理」の規準(criteria)は何か？の問題である。

例えば、ピタゴラスやアリストテレスの「万物は空気、火、水、土からなる」や五行思想の「万物は火、水、木、金、土からなる」は、「科学」のうちの「理論」物なのか、それとも「自然哲学」なのかは、「理」の規準がないと定まらない。

見えないものを捉えたと言うからには、「見えないものを理で捉える」の「理」は、やはりハードルの高いものでなければならない、となる。

いちばん条件をきつくしたものが、狭義の「理論」である。
即ち、言語、推論規則、公理を備え、「理論の展開」が「論理計算の展開」になるものである。

数学は、狭義「理論」の一つである。

「理論〇〇学」と称するものは、狭義「理論」である / でなければならない。

現実には、自分が「理」と思ったものが「理」である。「理」は、主観である。

そしてこの場合は、みな「理論」になってしまう——自称「理論」。

注：つぎは、狭義「理論」と、狭義「理論」でない自称「理論」の、簡単な見分け法である：

A. 狭義「理論」では、命題は「証明」をつけるものである。

証明として記述するのは、論理計算である。

学習テキストにおいて設問が、「〇〇を求めよ」の形のものは、狭義「理論」である。

B. 狭義「理論」でない自称「理論」は、論理計算が無いわけであるから、「証明」は最初から問題にならない。

学習テキストにおける設問は、「〇〇について論ぜよ」の形になる。

そして、〈師〉と同じ論じ方をすることが、高い点数をもらう方法になる。

そこで、「みな「理論」になってしまわないために」という程度の、「理」のハードルを考えることになる。

狭義の「理論」にしても、それがほんとうに「見えないものを捉える」

なのか、あるいはアブストラクト・ナンセンスをやっているだけなのか、という問題がある。

そしてここに、「実証」が、「理」の要件として導入されてくるわけである。

注：「科学」の要件」は、科学哲学のいちばんの主題である。よく知られている論に、K. Popper の「反証可能性」がある。

以上、「哲学」「科学」「理論」の用語を、ひじょうに大雑把だが概念整理した。

さてそこで、『資本論』はどういうものということになるか？

『資本論』は、狭義の「理論」にはなっていない、自称「理論」である。さらに、「現前と照らす」の形の「実証」が立たない、自称「理論」というふうになっている。

一般に、狭義「理論」にはなっていない、しかも「実証」が立たない自称「理論」は、「哲学」と区別のつかないものになる。

『資本論』は、自身を「経済理論」として立てるものであるが、結局「経済哲学」と区別がつかない。（→§「マルクス経済学」）

マルクス主義の「科学」は、「革命」が理論実験の形になる。

そしてこの実験により、理論は「反証」の形で実証されることになる。しかしこの実験法は、「はた迷惑」なものとして厳に退けるところとなる。

翻って、マルクス主義に対する「理論批判作法」は、つぎを述べることである：

《「革命」が、マルクス主義の「科学」の実験の形である。

この実験は、はた迷惑である。

一方、マルクス主義は、「革命」を実験とっていない。

自身の「科学」を、科学ではなく、<真理>にしているということである。》

2 「マルクス主義」の捉えの要諦

2.1 構造的捉え

2.2 理論家は〈理論の差別化〉で保身

2.2 「マルクスの理論」「マルクス者」

2.1 構造的捉え

本論考は、「マルクス主義批判」を行うものである。一般に、「批判」はつぎが手順になる：

1. 相手の思想の描く〈世界〉がどんな構造になるものかを示す。
2. この構造の無理（論理矛盾）を示す。
3. 「無理を通す」の結果を、論理的に導出する。

1. マルクス主義の世界観

どの思想も簡明である。

簡明でない思想は、思想でない。

簡明でない思想は、雑感・雑念のただの集積である。

思想の簡明は、文体に現れる。

ぐちゃぐちゃした文体は、思想が簡明でないことを示し、したがって思想でないことを示す。

ぐちゃぐちゃの文体を前にしたときは、これを捨てるか、読み手の方でこれをすっきりさせてやるかである。

すっきりさせるとは、文章を構造化するということである。

構造化にならないときは、最終的に捨てることになる。

このようにして、マルクス主義を思想として捉えてやる。

そのときそれは、「疎外されている諸個人の解放」の思想ということになる：

1. 「解放」の内容は、疎外の構造が無くなることである。
2. 「疎外」の内容は、「本来〈人は道具を使う〉であるのが、〈人は道具を使わされる〉（この意味で〈道具が人を使う〉）になっている」である。
これを「転倒」と称し、「転倒」がもとに戻ることを「解放」とする。
3. 〈道具が人を使う〉にしているものは、資本主義的生産様式である。
したがって、「解放」の内容は、資本主義的生産様式が無くなることである。
4. 資本主義的生産様式に替わる生産様式は、共産主義である。
共産主義社会は、人が他のものに使われることのない社会——自分が自分の主人になる社会——である。

ここで、「解放」実現の形について、二つの考え方がある：

- A. 資本主義的生産様式の自壊
- B. 資本主義体制打倒の破壊行動（「革命」）

本論考が批判しようとする「マルクス主義」は、「解放」実現の形を「革命」とするマルクス主義の方である。

2. マルクス主義の世界観の無理（論理矛盾）

資本主義的生産様式が立っている系は、複雑系である。

共産主義生産様式が立つは、相対的に著しい単純系である。

「革命」は、複雑系を単純系に変える行為である。

3. 「無理を通す」の結果

複雑系（大）を単純系（小）に替えることは、大と小の差分を整理することを含む。

この整理は、人の整理としては「粛正」「大虐殺」の形で現れ、富の整理としては「困窮化」の形で現れる。

2.2 理論家は＜理論の差別化＞で保身

理論は、実践でほころびを現す。

実践でのほころびは、理論の失敗に他ならない。

しかし、理論家は、失敗を認めない。

失敗の糊塗をする。

自分のことを、「自分は無謬で保っている」としているからである。

失敗糊塗は、つぎを形にする：

「理論を違えたから、失敗したのだ」

そして、理論差別化の作業を開始する。

ソ連邦・ヨーロッパ社会主義国家の崩潰に際し、マルクス主義者はこれを行った。

「理論を違えたから失敗したのだ」の論を以て、些かもマルクス主義の失敗とはしなかった。

2.2 「マルクスの理論」「マルクス者」

マルクス主義は、実践でほころぶ。

かなりみじめな失敗をさらす。

このようなとき、マルクス主義者の中から、「彼らとは違う者として自分を示していく必要がある」の思いから、つぎのように言う者が出てくる：

「自分は、マルクスの理論につくが、マルクス主義者ではない」

「自分は、マルクス主義者ではなく、マルクス者である」

マルクス主義批判は、マルクス主義を「構造」の次元で捉える。

そしてこの場合、「マルクスの理論につくが、マルクス主義者ではない」

「マルクス者」を唱えても、依然マルクス主義者である。

3 「疎外」

3.1 「疎外」

3.2 「矛盾・止揚」

3.3 「解放」

3.1 「疎外」

マルクス主義は、「資本主義的生産様式が自己疎外になっている諸個人の解放」を謳うイデオロギーである。

ここで「疎外」であるとするものは：

《自分の在り様が、資本家の利潤達成のシステムに埋め込まれる
——商品・金(かね)に支配される、「道具を使う」ではなく「道具を使わされる=道具に使われる」》

そしてこれを、人の本来の在り方がひっくり返ったものということで、「転倒」と表現する。

「疎外」「転倒」は、「正す」を含蓄する表現である。

「疎外」「転倒」は、「解放」を展望するところの表現である。

翻って、「正す」「解放」を考えない物事には、「疎外」「転倒」のことは用いない。

実際、個は、個であると同時に、個が活かされている系(「生態系」)のノードである。

自由であると同時に支配されている。

これを個の必然の在り方と見なすとき、「疎外」「転倒」のことは用いない。

そこで、これに「疎外」「転倒」のことは用い、そして生態系の管理を「解放」の形にするところのマルクス主義は、「個・生態系」の考え方として極めて独特なものだということになる。

実際、マルクス主義では、「社会的」と自分がとらえるものは、まずは「個

の転倒した在り方」の見方で捉えられないか考えてみようとするところとなる。

3.2 「矛盾・止揚」

マルクス主義は、「疎外」に「矛盾・止揚」の「矛盾」を重ね、「矛盾・止揚」の「止揚」に「解放」を重ねる。

実際、マルクス主義は、「矛盾・止揚」で物事の遷移を解釈する。

「矛盾・止揚」は、クセのある見方である。

例えば、「生態系」の遷移を論じるときの「攪乱・均衡」は、「矛盾・止揚」に相等するものであるが、「矛盾・止揚」は用いない。端的に、「攪乱・均衡」は「矛盾・止揚」ではないからである。

実際、「生態系」の遷移は「繰り返し」がふつうのパターンになるが、「攪乱・均衡」は「繰り返し」を説明する。これに対し、「矛盾・止揚」は、一方向の「進歩」を説明しようとするものである。

そして「生態系」の思想だと、「矛盾」はつぎのように言うところである：

《個は、支配され同時に自由》

ちなみに、ヘーゲルの「矛盾」は、「理念（内容）とその現象（形式）の対立」である。これに「支配され同時に自由」をあてはめるならば、「形式」が「支配され」の側、そして「内容」が「自由」の側になる。

3.3 「解放」

マルクス主義の「疎外」は、「解放」を俟つ存り方である。

この解放は、「系の管理が個を解放」である。

マルクス主義は、「管理による解放」のイデオロギーである。

比較：「生態系」の思想だと、つぎの考え方になる：

《個は、支配されていて同時に自由である》

《個は、支配されていて同時に自由であるの構えで、
自分の解放を志向する》

マルクス主義は、「解放」を「進歩」の歴史観と重ね合わせる——歴史的必然にする：

《「解放」の諸条件が、資本主義的生産様式そのものの発展によって充足される》

またこのとき、《疎外は実践的に解放されねばならない》（「革命」）も、立場として留保する。

4 「共産主義」

4.1 放任主義に対する管理主義

4.2 管理主義の含蓄——独善と圧政

4.3 意識改革・思想統制

4.1 放任主義に対する管理主義

マルクス主義は、放任主義（自由主義）に対するところの管理主義である。

実際、資本主義的生産様式の現前は、放任すれば資本主義的生産様式になるということである。共産主義生産様式は、管理主義を以て維持するものとなる。

註：アダム・スミスの「神の見えざる手」は、放任主義である。

4.2 管理主義の含蓄——独善と圧政

「共産主義」は、つぎの思想である：

1. <人は道具を使う>がほんとうであるのに、資本主義生産様式では<人は道具を使わされる>（この意味で<道具が人を使う>）になっている。この転倒が、現前の「疎外」の内容である。
2. そこで、この転倒をもとに戻すことが、「解放」になる。
行うことは、資本主義的生産様式を共産主義生産様式に替えることである。

共産主義は、<人は道具を使う>を管理主義で実現するというものである。

それはどのようにして？

道具所有を共同にする。

ところで、道具所有を共同にするとは、仕事を共同作業にするということ、即ち、仕事を共同作業として組まねばならないということである。さらに、仕事の共同化は、生活一般の共同化を含意する。この共同が管理されねばならない。

一般に、管理主義には「管理者が<正しさ>を有している」が含意されている。

実際には、管理者と<正しさ>とは関係がない。

よって、管理主義は独善である。

管理主義は、「逸脱者の処分」を含意する。

管理主義は、独善を以て、ひとを裁くものである。

これは、「圧政」になる。

共産主義の含意になる「共同の管理」は、実際「統制」である。

共同から逸脱する者は「不正分子」であり、矯正のための「教育」にかけられる。

矯正不能は、処分になる。

ひとは、型に嵌められて生きるふうになる。

このように、「道具所有の共同」は、「道具所有の共同」で終わらない。深刻にネガティブな含蓄がある。

(一般に、単純思考回路のつくるものは、こうである。)

ちなみに、ブラック企業は、圧政の共産主義国家に似ている。

自由主義社会の企業だから自由主義というわけではない。

実際、管理主義企業は、単体では共産主義国家と同型である。

共産主義の含蓄する「管理」は、管理主体を「共産党」にする。

「共産党」は、絶対的<善>の所在である。

絶対的<善>として、<悪>があればこれを退治するものである。

今日、北朝鮮の体制は「非人道的」と批判されるが、この体制こそ「共産党」の最も「正しい」形を示している。

実際、「拉致」が知られることになる前は、マルクス主義者の北朝鮮詣が続いていたのである。「拉致」問題がなければ、いまでもこれは続いているわけである。

4.3 意識改革・思想統制

「共産主義」は、「個のあらゆる生活形態において、個を共同に組み入れ、共同を管理する」を含蓄する。——こうなるのは、共産主義が余裕のないシステムだからである。

「個のあらゆる生活形態において、個を共同に組み入れ、共同を管理する」は、無理である。人はそうなるものではないからである。

そこで、統制に向かうことになる。

思想統制では、考え方に善悪を立て、悪い考え方をする者を懲罰する。

ブラック企業は、「個のあらゆる生活形態において、個を共同に組み入れ、共同を管理する」「考え方に善悪を立て、悪い考え方をする者を懲罰する」を以て「ブラック企業」である。ブラック企業は、「経営者＝共産党」一党独裁の共産主義である。

わたしは組織の中で、ときたま「悪い思想をもった者」になるのだが、善悪のリトマス紙はマルクス主義のイデオロギーであることが多い。

註：トップダウンでくる「善悪」は、善悪ではない。それは形式である。

善悪は、上からではなく、横からくる。

5 「革命」

5.1 「革命」の意味・含蓄

5.2 破滅への道連れ

5.3 「修正主義」

5.1 「革命」の意味・含蓄

マルクス主義の「矛盾・止揚」は、「矛盾は実践的に変革されねばならない」の世界観である。

マルクス主義とは、現前の「諸個人の疎外」を「資本主義的生産様式の矛盾」と定め、そこで「諸個人の解放」を「矛盾の止揚」と重ねることになり、そして、「矛盾の止揚」として「共産主義的生産様式」を立てる、というものである。

ところで、共産主義的生産様式は、諸個人による生産様式の管理、富の再配分であるから、共産主義的生産様式の実現には、「諸個人が管理できるところまで生産様式を縮小・単純化する」が含蓄されることになる。実際、「革命」は、機能的には、この「縮小・単純化」の実践に他ならない。

5.2 破滅への道連れ

わたしが「マルクス主義批判」をつくるとき、その理由は、マルクス主義が迷惑な思想だからである。

例えば、スターリン粛正や、毛沢東文化大革命や、ポル・ポト民主カンブチアにおける大虐殺は、マルクス主義が導く行動様式の典型になるものである。

そしてこれらに対し、わたしは殺られる側に自分を重ねる者である。そこで、わたしにとって、マルクス主義は迷惑な思想である。

スターリン粛正や、毛沢東文化大革命や、ポル・ポト民主カンブチアにおける大虐殺は、「個人の資質」とか「マルクスの理論が曲げられてしまった」とか「行動の逸脱・変質」のはなしではない。これらは、「マルクスの理論」の論理的含蓄である。

マルクス主義とは、現前の「諸個人の疎外」を「資本主義的生産様式の矛盾」と定め、そこで「諸個人の解放」を「矛盾の止揚」と重ねることになり、そして、「矛盾の止揚」として「共産主義的生産様式」を立てる、というものである。

ところで、共産主義的生産様式は、諸個人による生産様式の管理、富の再配分であるから、共産主義的生産様式の実現には、「諸個人が管理できるところまで生産様式を縮小・単純化する」が含蓄されることになる。実際、この「縮小・単純化」の実践を「革命」と称しているわけである。

しかし、このようなことを考えたり言えたりするのは、「諸個人 - 対 - 資

本主義的生産様式」の定立で考えているからである。

「個と生態系」だったら、「矛盾の止揚」や「個の解放」「個による生態系の管理」を言いたくなるか？「個が管理できるところまで生態系を縮小・単純化」（「革命」）を言いたくなるか？

言いたくはない。

なぜなら、「個と生態系」だと、「個は、支配されていて同時に自由」があたりまえになるからである。もし「個の解放」「個による生態系の管理」を唱えて「個が管理できるところまで生態系を縮小・単純化」（「革命」）をやれば、それが自殺行為（「自分を生かしているものを殺すことで、自分を殺す」）だということが、容易にわかるからである。

マルクス主義は、「個と系/場」の関係性に対し、「個が管理できるところまで系/場を縮小・単純化」（「革命」）を立て、これの実践に進もうとする思想である。そして、これの実践では、殺られる者が多数出てくる。系/場の破壊で、破滅への道連れになる者が大量に出てくる。以上が、「マルクス主義は迷惑な思想」の構造である。

5.3 「修正主義」

理論家は、理論が人をリードするというふうに考える。

しかし、人は理論で行動するのではない。

実際、状況に理論は不在である。

人のダイナミズムが在るばかりである。

このとき人を導いている理論のように見えるものは、政略である。

政略は、つぎには、理論の地位が与えられる——「修正主義」。

6 「唯物論」

6.0 要旨

6.1 「唯物論」の方法論と限界

6.2 「市民社会」

6.3 「人間的存在」

6.4 「言語」

6.5 「歴史」(「史的唯物論」)

6.6 「科学による哲学の終焉」の標榜

6.0 要旨

わたしは、自分の存在論・認識論の方法が、唯物論のそれと同型であることを見出す。

そこで、自分と唯物論の違いが何であるかを自分にはっきりさせようとして、論述をつくってみる。

この論述は、「唯物論批判」になる。

わたしの存在論・認識論の方法が唯物論のそれと同型であるというのは、唯物論が

「人間—社会—社会的な生活過程—意識—言語」

を立てるのに対しわたしは

「人間 / 動植物—生態系—生きる—カラダ—形式」

を立てていて、そしてこの二つは同型だということである。

そして、唯物論とわたしの違いは、「人間・生態系」の位置付け / 評価の仕方である。

即ち、唯物論は、人間を高めに評価する。

これは、生態系を低めに評価するということである。

生態系を低めに評価するとは、生態系の複雑性を低めに見るということである。

そして「社会」が生態系と同等視されるものになり、人間はこれの主人であり得る者になる。

「人間は自由である」「人間は人間の生活を管理できる」となる。

そこで、「革命」の概念も立つ。

わたしは、生態系を高めに評価する。

これは、人間を低めに評価するということである。

人間は、自分以外の種に対する生殺与奪権を欲しいままにする存在として拡大し、生態系において「罰当たり」の存在になり、「報い」として自分で自分を滅ぼしていくことになる存在である。

実際、人間社会の進歩を謳っても、大局的には、資源の荒廃・枯渇へ確実にそして加速度的に向かっているということである。

生態系の内なる存在としての人間は、「人間は支配されている」「人間は人間の<生きる>を管理できない」となる。

「革命」は、「自分が生かされている系を壊し、このことで自らを殺す」になり、ロジックとして立たないものになる。

6.1 「唯物論」の方法論と限界

マルクス主義は、「革命」のイデオロギーである。
 現前をすべて一新すべきものと定め、これの「革命」を企てる。
 一新すべき現前のうちには、思想 / 哲学が当然入ってくる。
 思想 / 哲学の「革命」が、「唯物論」である。

唯物論は、構成主義が方法論である。
 「集合」ベースの構成主義の数学に似ている。
 見掛け、規範学になる。

唯物論は、人が対象化しているものすべてを「物」から構成しようという
 企てである。
 とりわけ、自分が「観念的産物」と称しているところの「意識」「言語」
 といったものを、「物」から構成しようとする。
 実際、これができれば、唯物論はたいしたものということになる。

この企ては、当然成功しない。
 大工仕事で「心」をつくれぬのと同じである。

しかし、マルクス主義者は、自分の優位性を信じる者であるから、この
 企てに前のめりの体(てい)で入っていく。
 しかも、唯物論は、体勢として規範学である。
 結果として、「唯物論」は、この名前とは真逆の空論をつくり出すもの
 になる。

6.2 「市民社会」

唯物論は、人が対象化しているものすべてを「物」から構成しようという
 企てである。
 とりわけ、「観念的産物」を「物」から構成しようとする。
 この企ては、当然のことながら、成功しない。
 大工仕事で「心」をつくれぬのと同じである。

しかも、「唯物論」は、自分の守備領域をひどく小さく見積もってしまう。
 即ち、「社会での生活過程」にする。
 そして、「社会」はさらに「市民社会」に、そして「資本主義的生産様
 式の社会」に、見積もられる。
 こうして、「資本主義経済」の押さえが唯物論の企画の本丸と定められる。
 ——実際、これが『資本論』の位置付けになる。

マルクス主義は自分が「社会」を立てるとき、よくフォイエルバッハを
 引き合いに出す。即ち、「フォイエルバッハは、唯物論だが、自然科学
 的だ——「社会」が抜け落ちている」と論じるのである。
 しかしこれは、かえって自分の首を絞めてしまうことになる。
 即ち、「自然」が「物」の次元なのであるから、「唯物論は、観念的産物
 を社会での生活過程から導かねばならない」とする者は、自らを

<「社会での生活過程」を「自然」から導く者>

にしなければならない。そしてこのとき、自分はフォイエルバッハで
 ある。

わたしは、マルクス主義者と比べ、「社会」「経済」をはるかに小さく

見積もる者である。

マルクス主義者が例えば「生活過程 → 意識 → 言語」の枠組を立てるとき、わたしは「生きる → カラダ → 形式」の枠組を立てることになる。——ここで「生きる」の〈場〉は「生態系」であり、「社会」はこれの一部という位置付けになる。

(→ 『「学校数学＝形式陶冶」の「形式」とは?』)

6.3 「人間的存在」

唯物論は、「観念的産物」を「社会的生活過程」から構成してみせようとする。

その構成過程に、「人間的な自然存在」「意識」を描く：

動植物はただ生活活動するものであり、これに対し人間は自分の生活活動を対象にする存在である。

人間のこの存り方は、「対自的存在者」である。

「対自」は、「自己意識」である。

「自己意識」は、「対象意識」と同時の契機である。

特に、人間の生活活動は、自分の生活活動を対象化している生活活動であるから、「自由」だとなり、動物の生活活動は、〈生活活動させられている〉ということになるから、「支配されている」となる。

わたしは、人間の〈生きる〉を動植物の〈生きる〉から本質的に区別することができないとする者である。

〈生きる〉は、〈自分〉のことであり、〈周り〉のことである。〈生きる〉は、〈自分〉と〈周り〉を含蓄する。

また、唯物論が立てる「意識」は、わたしの場合は「カラダ」になる。そして、人間も動植物も〈生きる〉は「カラダを以て生きる」「生態系に生きる」であるから、人間も動植物も、〈生きる〉は「支配され同時に自由」である。

6.4 「言語」

言語の登場機会は相対的に僅かである》

唯物論は、自身の言語論を紡ぐ。

この言語論は、「言語は存在の反映」論である。

即ち、つぎの導出関係を定立しようとする：

「存在」(「物」) → 「(社会的)生活活動」 → 「意識」 → 「言語」

特に、「言語」は「存在」とびったり添うものになる。

これは、プラトンに先祖返りする様である。

そこで、「形而上学批判」「合理主義批判」の趣きでプラトンの伝統を批判するタイプの哲学的立場は、そのままマルクス主義の言語論(反映論)を批判するものになる。

「反映論」の特徴は、対象とする系をひどく単純な系として立てるところにある。

その系は、「人為」の系である。

「言語」は、「人」にのみ考えられるものになる。

ほんとうか？

わたしは、唯物論の「(社会的)生活活動・意識・言語」に対し、「生きる・カラダ・形式」を立てる。

このとき、「生活活動する人間の意識・言語」と「生きる人間・動植物のカラダ・形式」の間に、本質的違いは立たない。

「差異」の図は、区切りの線にはならず、せいぜいグラデーションである。

「人」に限って見ても、つぎのようである：

《わたしの〈生きる〉は、言語の無い形式にほぼ依拠していて、

6.5 「歴史」 (「史的唯物論」)

マルクス主義は、共産主義社会がゴールになる発達史観を立てる。
さらに、これが科学に拠っていることを信ずる。
その科学は、「唯物論」である。
こうして、「科学のロジックが共産主義社会の到来を導くゆえに、共産主義社会の到来は歴史的必然」となる。

マルクス主義が「科学」と見立てる歴史の力学は、「弁証法」である。
マルクス主義は、ヘーゲルの「弁証法」を物質の運動法則に転じる (「唯物弁証法」) 。

マルクス主義の歴史観は、なぜこのようなのか？
特定部分をひどく拡大視し、測度の感覚を著しく欠損させた、そんな思想だからである。
特に、<自分>をとんでもなく大きなものに見てしまう。

一般に、「実践的思想」と自ら称する思想は、すべてこうである。
実際、マルクス主義は、実践的思想である。
このとき、<自分>をとんでもなく大きなものに見てしまうから実践的になるのか？ それとも、実践的であろうとすることと<自分>をとんでもなく大きなものに見ることは、同じなのか？ —— 後者である。

史的唯物論は、小さくて歪んだ世界観で大言壮語を言う体 (てい) である。
この史的唯物論から実践論を紡ぐとき、「正義の改革」 (「革命」) のは

た迷惑行動になる。

弁証法は、「メカニズム」の考え方である。
「メカニズム」は、系が大きくなるほどに、使えなくなる。
歴史は、そのような系である。
歴史をメカニカルなものに定めようとするのは、思考の単純の証左である。

実際、「メカニズム」は、「存在」を立てる思考回路 (「形而上学」) がつくるものである。
一方、現実的な対象は、出現し変化しそして消滅するものである。したがって、その間のどこに「存在」を立てようというのかというのはなしになるのである。(ハイデッガー『存在と時間』の「時間」の含蓄！)

「歴史」の系は、思考するほどにどんどん広がる。
複雑思考は、「存在」という対象措定を保てないものにする。
特に、「歴史」という対象措定を保てないものにする。

マルクス主義が、「正義の改革」 (「革命」) を立てるのは、単純系を立てる単純思考だからである。
「正義」というものは、系を広げると無くなる。
翻って、「正義」は単純系思考回路が立てる。
マルクス主義は、これである。

実際、「社会」や「歴史」のことになると、マルクス主義は、「人為」しか目に入らない。

「人」以外は、「図と地」の地になる。

だから、「実践」について言ったりやり出したりすると、一事が万事ダメなのである。

一事が万事どうしようもなくなるというわけである。

6.6 「科学による哲学の終焉」の標榜

「唯物論」は、自身を科学の立場であるとする。

科学主義を以て「哲学」に終止符を打とうとする。

しかし、この科学主義の意味は、「実証主義」ではない。

「構成主義」である。

実際、唯物論は、「集合」ベースの構成主義の数学に似ている。

見掛け、規範学になる。

規範学は、とことんお膳立をして、はじめてスタートできる。

規範学にするためのお膳立てがある。

その「お膳立」とは、多くのことを「見ないことにする・捨てることにする」である。

「唯物論」の科学主義の標榜では、自身の「規範学」の仕組みが認識されていない。

この意味で、「唯物論」は、「科学」を思考停止した科学主義、科学がわかっていない科学主義になっている。

そして、そもそも、「わたし」の存在の不思議：

「このわたし——ある時この世に現れ、そしてやがて死んでこの世からいなくなるこのわたし——は、どうして出現するのか？」

を不思議にしていない者、この不思議を不思議でなくすることのできない者は、「哲学」に終止符を打つ資格はない。なぜなら、哲学がこの問題を負うものになっているからである。

7 「マルクス経済学」 (『資本論』)

7.0 要旨

7.1 『資本論』 は、商品経済学

7.2 『資本論』 は、恐慌論が商品経済学

7.3 『資本論』 は、疎外論

7.4 『資本論』 は、価値論が唯物論

7.5 『資本論』 の価値論

7.0 要旨

「マルクス経済学」は、『資本論』の内容のことである。

『資本論』は、商品経済学である。

商品経済学であるから、「資本論」の表題はミスリーディングである。

『資本論』は、ひどくグチャグチャした物言いの論考である。

その文体は、今日、人の読めるものではない。

端的に、〈ことば〉の逸脱である。

グチャグチャした物言いはどうしてなのかというと、歴史性(「その時代には、到達点はそこまで」)として、論述の形式が未熟だからである。そして、『資本論』は価値論から始められるが、この価値論がまたひどい空論なのである。

そこで、『資本論』の読み方は、《この文体を自分のものにする》ではない。『資本論』がわかるとは、言っていることがわかるではなく、結局何をやっているかがわかるである。

『資本論』は膨大なテキストであるが、結局何をやっているかは、ごく小さなテキストで述べることができる。

『資本論』を「結局何をやっているか」で捉える方法は、《『資本論』の物言いを構造にする》である。

このとき、『資本論』は一気にコンパクトになる。

併せて、『資本論』が設定する枠組の無理、論述形式の未熟も見えてくる。

即ち、《構造にする》は、『資本論』の批判になる。

翻って、《構造にする》が『資本論』の批判作法というわけである。

本章では、この《構造にする》を示す。

7.1 『資本論』は、商品経済学

7.1.1 『資本論』は、商品経済学

7.1.2 『資本論』は、「資本論」の表題が拙い

7.1.3 『資本論』が共産主義者の経済学になったわけ

7.1.1 『資本論』は、商品経済学

『資本論』は、商品経済を科学したものである。

『資本論』は、商品経済学である。

近代の経済は商品経済であるから、科学としての経済学の形は商品経済学である。

『資本論』は、商品経済学をとことん作り込んだものである。

註：ここでは、「科学としての経済学」を「商(あきない)学」に対立させて謂う。

「科学としての経済学は、『資本論』である」には、「大部分の経済学は、商(あきない)学である」の含蓄を持たせている。

7.1.2 『資本論』は、「資本論」の表題が拙い

『資本論』は、商品経済を科学したものである。

『資本論』は、商品経済学である。

商品経済は、「無くてよいものの生産・消費」が無限上昇スパイラルで回転する系である。

——商品経済に棲むとは、これを強いられるということである。

無限上昇スパイラルは保てるものではなく、倒壊必定である。

——これが「恐慌」である。

商品経済において、資本家の役割(「資本主義」)は本質的でない。

『資本論』("Das Kapital")の表題は、『資本論』が商品経済学であることを見えにくくする。

なぜ『資本論』の表題になった？

マルクスの時代は、「資本家」が目立った。

そこで「資本論」の表題になったということである。

7.1.3 『資本論』が共産主義者の経済学になったわけ

『資本論』は、マルクスの経済学である。

マルクスは『共産党宣言』をつくった。——このことで、マルクスは共産主義イデオログである。

共産主義者は、共産主義イデオログとしてのマルクスを崇める。

以上を短絡的につなげて、「『資本論』は共産主義者の経済学」となる。

マルクスは、「矛盾の止揚」として共産主義を立てた。

しかし、人が「矛盾の止揚」として行うことは、物事の複雑がわからない者の所業であるから、よりひどい事態を招くだけとなる。

実際、共産主義国家は、「よりひどい事態を招く」の実際証明になった。

『資本論』は、「『資本論』は共産主義者の経済学」の位置づけで、共産主義国家と同罪にされる。

共産主義を退ける者は、『資本論』を退けねばならない者になる。

ここが、『資本論』の不幸である。

繰り返すが、『資本論』は商品経済を科学したものであり、商品経済学である。

マルクスは『資本論』を科学者のスタンスでつくっている。共産主義イデオログのマルクスは、『資本論』の中にはいない。

7.2 『資本論』は、恐慌論が商品経済学

『資本論』は、商品経済を科学したものである。

『資本論』は、商品経済学である。

商品経済は、「無くてよいものの生産・消費」が無限上昇スパイラルで回転する系である。

——商品経済に棲むとは、これを強られるということである。

無限上昇スパイラルは保てるものではなく、倒壊必定である。

——これが「恐慌」である。

『資本論』は、恐慌論が商品経済学になっている。

「無くてよいものの生産」は、マルクスのことばでは「過剰生産」である。

7.3 『資本論』は、疎外論

商品経済は、「無くてよいものの生産・消費」が無限上昇スパイラルで回転する系である。

——商品経済に棲むとは、これを強られるということである。

「無くてよいものの生産」は、『資本論』のことばでは「過剰生産」である。

『資本論』は、「過剰生産」を「強られる」の構造で説明する。

これは、疎外論である。

『資本論』は、疎外論である。

7.4 『資本論』は、価値論が唯物論

『資本論』の価値論は、「価値」の導出をする。

この導出方法は、数学の「商集合の導出」である。

この方法は、§7.5(『資本論』の価値論)で詳しく解説する。

ここでは、この方法こそが「唯物論」なのだということを、指摘しておく。

数学の「商集合の導出」は、つぎのものである。

最初に、集合がある。

ここに、集合の要素間の同値関係を導入する。

——「同値関係」は、卑近で考える「同値」「同類」の関係を考えればよい。

ここで、同値な要素同士を、類に括る。

——類は、「同値類」と呼ばれる。

このとき、集合は、同値類に分割される。

ここで、同値類を要素にする集合を考える。

——集合は、「商集合」と呼ばれる。

いま、この「商集合の導出」をつぎのように読む：

- ・最初の集合の要素を、「物」と読む
- ・商集合の集合の要素を、「概念」と読む

こうして、概念は物から導出されたことになる。

そこで、「概念はすべからく、このように物から導出されたものである」

の考えがもたれるかも知れない。

この考えが、「唯物論」である。

『資本論』の価値論は、商品(物)の交換(同値関係)から価値(概念)を導く論である。

『資本論』の価値論は、唯物論である。

註：集合論は、数学者カントールの作である。

唯物論の存在論は、畢竟、カントールの集合論の中の「集合—同値関係—商集合」である。

『資本論』の価値論——商品の交換から価値を導出——は、「集合—同値関係—商集合」であった。

「集合—同値関係—商集合」による〈物から概念を導出〉の最もわかりやすい例は、やはり「数」である。

これは、「〈物の集まり〉の集合」から出発する。

そして、〈物の集まり〉同士の関係として「1対1の対応がつく」を考える。

この関係は、〈物の集まり〉の集合の上の同値関係になる。

この同値関係で商集合をつくる。

商集合の要素を、「数」と定める。

同じ個数の〈物の集まり〉同士は、1対1の対応がつく。

この順序を逆転して、「1対1の対応がつく」から「個数」即ち「数」を導く。

「物 → 数」の順序にできたわけである。

唯物論者は、この「数」を自分たちの数にする。

併せて、この「数」の敵を定める。

唯物論者が「敵側の数」と定めた数は、「数え主義」の数である。

数え主義は、先に数があって、つぎに物がくる。

カントールとクロネッカーの逸話——「数え主義」に立つクロネッカーがカントールをいじめたという逸話——があって、自分たちのカントールが善玉になる配役もうまくできあがる。

そこでいよいよ、敵を倒しに出陣である。

「正義の戦い」がこの戦いの位置づけである。

——このようなことが、戦後日本の社会主義運動において生じた。

7.5 『資本論』の価値論

7.5.1 『資本論』の価値論は、拙論

7.5.2 「商品」

7.5.3 「価値」

7.5.4 「貨幣」

7.5.5 「労働」

7.5.6 「剰余価値」

7.5.7 『資本論』の価値論は、無用

7.5.1 『資本論』の価値論は、拙論

『資本論』は恐慌論が商品経済学になっている」と述べた。
これには、『資本論』には出来の悪い部分もある」の意味も込められる。
実際、価値論は拙論である。

『資本論』の価値論は、基本、「商品の交換」から「価値」を構成する論である。

そしてこれは、「集合」ベースの構成主義の数学のやり方と近い。
特に、『資本論』の価値論は「価値の規範学」といってよいものである。

『資本論』の「価値の規範学」は、開始早々、リアルからまったくかけ離れたものになる。

推論の理として、その後は空論に次ぐ空論の様相を加速度的に濃くしていく。

実際、価値論のいちばんの力点は、「商品」としての「労働」の特殊性から「剰余価値」を導出する論にあるが、このあたりになると、もはやロジックを接げないふうになる。以降は、レトリックに騙されて読み進むのみである。

価値論に『資本論』のエッセンスを見ようとするのは、間違いである。
しかし、価値論を『資本論』のエッセンスのように見るむきがある。
そこで、以下、『資本論』の価値論の解説——『資本論』の価値論の拙劣の解説——を行う。

7.5.2 「商品」

『資本論』は、価値論が目立つ。
その価値論は、「物の交換」から「価値」を構成することを特徴とする。

ここで、「物の交換」は「商品の交換」である。
価値論は、物が商品として交換される系/場を先ず立てる。
物が商品として交換される系/場が、価値論の世界である。

翻って、「物が商品として交換される系/場」がリアルに立たなければ、
価値論は観念論になる。

実際、価値論は、「物が商品として交換される系/場」から開始される
構成主義の論述になっている。——この意味で「規範学」として見るこ
とになるものである。

7.5.3 「価値」

『資本論』の価値論は、「価値」を実体的に定立する。

ところで、これの論述は、きわめて読みにくい。これは、論述をすっきりさせるロジックが見出されてされていないためである。

「価値」を定立する論述は、論述をすっきりさせるロジックが見出されてされていない体(てい)の論述である。

今日だと、そのロジックは数学の「商集合・商構造」であることがわかる。マルクスの「価値」の構成法は、この数学を以て簡明に述べられるのである。

また、この数学に照らすことで、併せて、「価値」概念の無理・観念性がはっきり見てとれるようになる。

以下、このことを示す。

1. 「類別」

生活の中で「類別」(「仲間分け」)はよくあることだが、数学はこれがつぎの「 \sim 」の規則になるものだということを捉える(「 \sim 」は「同類」ないし「仲間」と読むとよい)：

$$1^\circ x \sim x$$

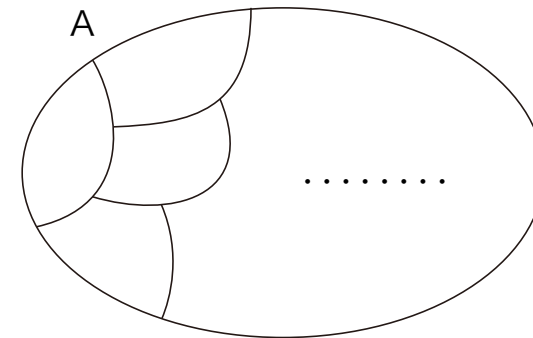
$$2^\circ x \sim y \text{ ならば } y \sim x$$

$$3^\circ x \sim y \text{ かつ } y \sim z \text{ ならば } x \sim z$$

(「 x と y が同類で y と z が同類ならば、 x と z は同類」)

即ち、集合 A の要素の間に「 \sim 」の関係があれば、集合 A の要素は「 \sim 」によって類別される。

「 \sim 」は、「同値関係」と呼ばれる。

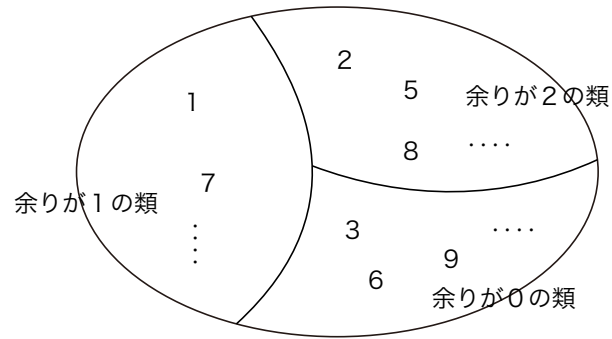


例：自然数 $1, 2, 3, \dots$ の集合において、つぎの「 \sim 」は同値関係：

自然数 x, y に対し、「 $x \sim y$ 」を「 x, y を3で割った余りは同じ」の意味とする。

(「 x, y を3で割った余りは同じ」は、「 x と y の差は3の倍数」と言っても同じ。)

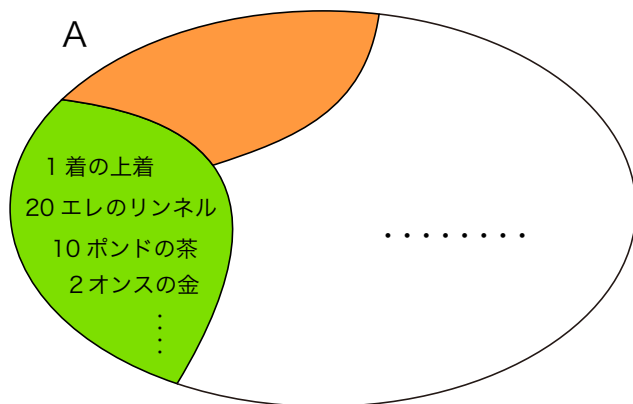
このとき、自然数の集合は、3つの類に分けられる——余りが0の類、余りが1の類、余りが2の類。



「価値」の構成では、集合Aとして、人が交換し合う商品の集合を考える。そして、つぎの「 \sim 」を、Aにおける同値関係と見なす：

商品x, yに対し、「 $x \sim y$ 」を「xとyは交換される」の意味とする。

この「 \sim 」によって、集合Aは類別される。——交換可能な商品どうしの類に分けられる。



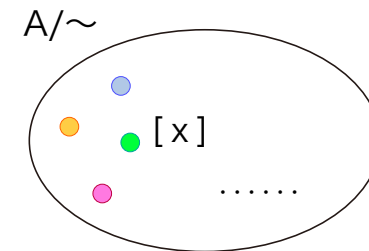
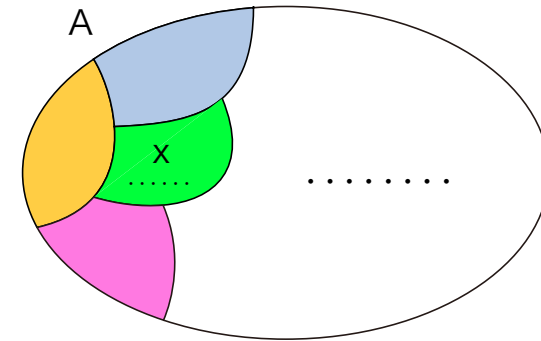
2. 「商集合」

集合Aは、同値関係「 \sim 」によって、類別された。

ここで、類を要素とする集合を考える。

これを「 A / \sim 」で表し、「同値関係 \sim に関するAの商集合」と呼ぶ。

Aの要素xの属する類を $[x]$ で表す。

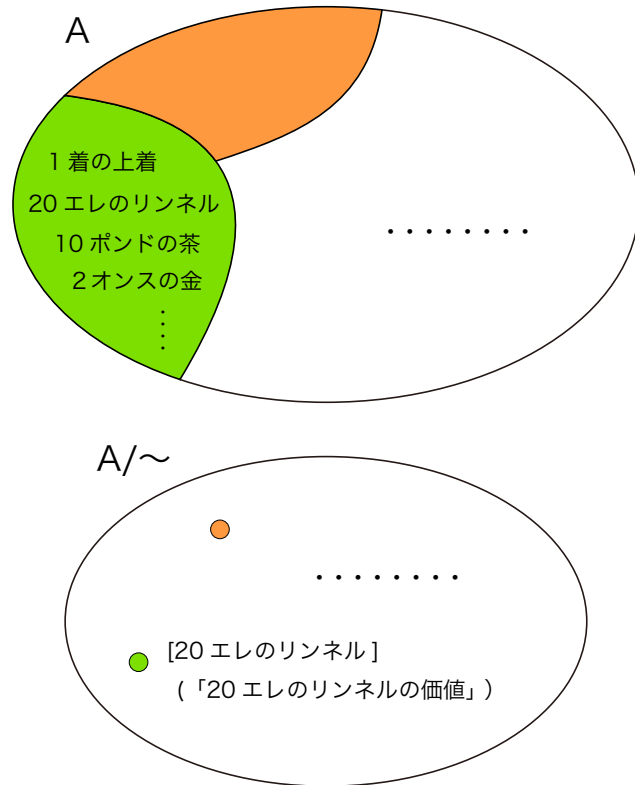


集合Aとして人が交換し合う商品の集合を考え、「互いに交換される」を同値関係「 \sim 」と見なした。そして、Aを交換可能な商品どうしの類に分けた。

ここで、集合 A / \sim (交換可能な商品どうしの類を要素とする集合) を考える。

そして、 A / \sim の要素を「価値」と定める。

商品xに対する $[x]$ が、「xの価値」である。



3. 「代数的構造」

集合Aの要素の間に和「+」が定義されているとき、これはA / ~ の要素の間の和を導く：

$$[x] + [y] = [x + y]$$

集合Aとして人が交換し合う商品の集合を考え、「互いに交換される」を同値関係「~」と見なした。そして、商集合A / ~ を以て「価値」を定義した。このとき、商品xに対する[x]が、「xの価値」である。ところで、商品xと商品yを合わせたものは、交換にのるところのまた一つの商品である。即ち、Aの要素には和「+」が定義される。この和は、A / ~ の要素の和、即ち価値の和を導く。

$$[x] + [y] = [x + y]$$

以上、『資本論』における「価値」の定立の仕方を、数学に照らして、明らかにしてきた。

そして数学に照らすことで、併せて、「価値」概念の無理・観念性が併せて見てとれることにもなる。

即ち、「価値」構成の出発点は「互いに交換される」を同値関係「~」と見なすことであったが、これは無理であり観念論である。

翻って、『資本論』の「価値」論は、「価値」を規範として立てる論である。

7.5.4 「貨幣」

『資本論』の価値論は、「価値」をつぎのように定立する論である：

集合Aとして人が交換し合う商品の集合を考え、「互いに交換される」を同値関係「 \sim 」と見なす。

そして、商集合 A/\sim を以て「価値」を定義する。

——このとき、商品xに対する $[x]$ が、「xの価値」である。

ところで、商品xと商品yを合わせたものは、交換にのるところのまた一つの商品である。即ち、Aの要素には和「+」が定義される。

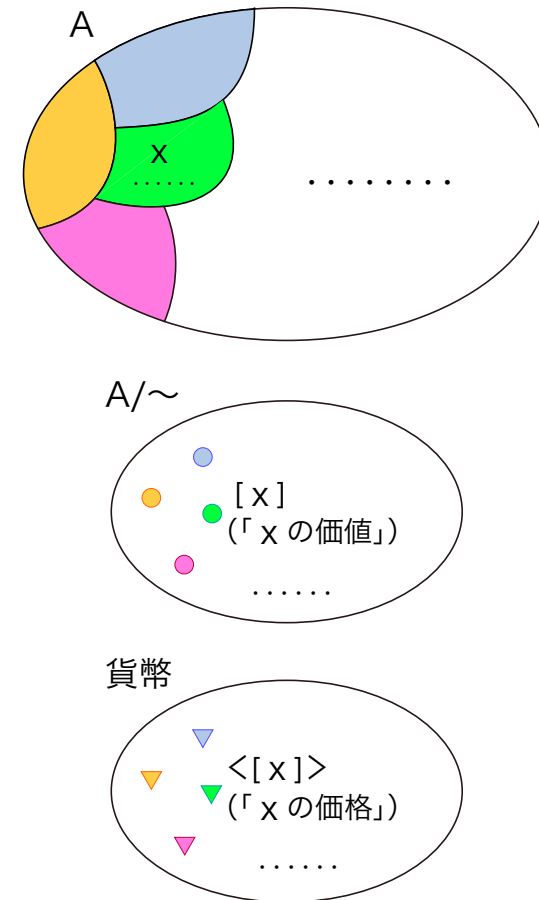
そしてこの和は、 A/\sim の要素の和、即ち価値の和を導く。

このとき「貨幣」は、価値の記号(名前)である。

即ち、 A/\sim の要素である価値の記号である。

価値 ξ に対応する貨幣を $\langle \xi \rangle$ で表すことにする。

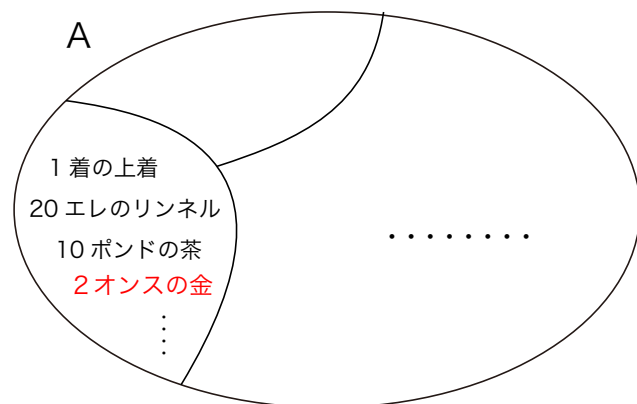
商品xに対する「xの価格はn」は、式 $\langle [x] \rangle = n$ を言い表したものである。



貨幣〈ξ〉の所有は、価値 ξ の所有である。

註：価値所有の仕方の一つに、「金(きん)」の所有がある：

2オンスの金の所有は、価値 [2オンスの金] の所有になる。



さて、以上示してきた「貨幣」の定立であるが、これは実際には無理である。

即ち、交換は絶えず変動するが、『資本論』の「交換・価値・貨幣」の定立は、この変動を捨象するものになる。そしてこの捨象で、『資本論』の「交換・価値・貨幣」の定立はまったく非現実なものになる。

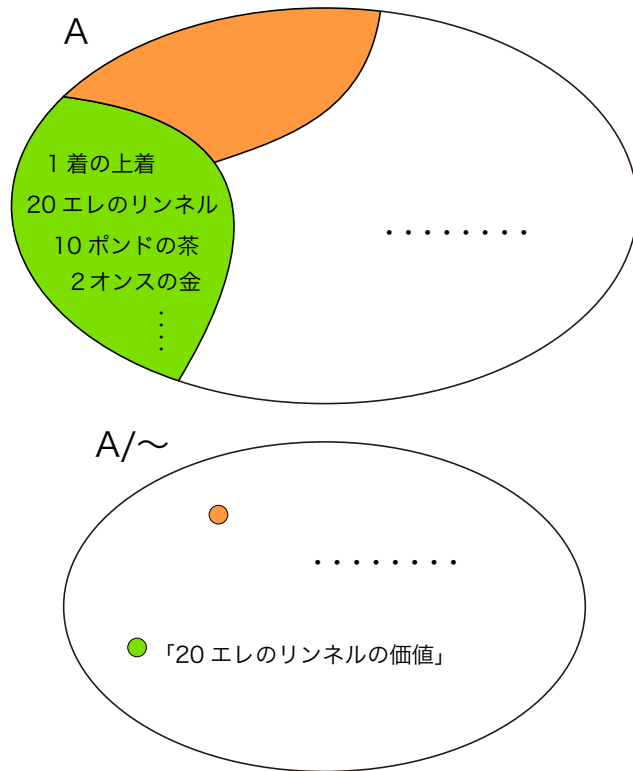
7.5.5 「労働」

『資本論』の価値論は、「商品の交換」から「価値」を導出する。
 同じ論法は、「労働の価値」を導出する。

商品全体の集合Aを考える。

「商品xとyが交換される」を、Aにおける同値関係「 $x \sim y$ 」と見なす。

Aから商集合A/ \sim を導出することが、「価値」の導入であった。



商品xに対し、「xの生産に要する労働」 $w(x)$ を考える。

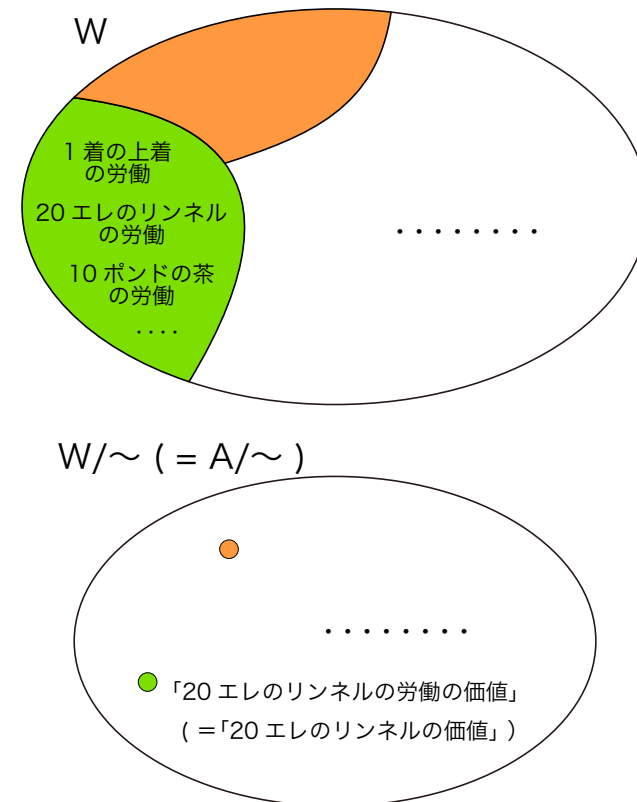
そして、xがA全体を涉るときの $w(x)$ 全体の集合をWで表す。

$x \sim y$ に対し $w(x) \sim w(y)$ と定めると、後者の「 \sim 」はWの同値関係になる。

Wから W/\sim を導き、そして W/\sim を A/\sim と同一視する。

即ち、商品xに対し、 $[w(x)] = [x]$ とする。

こうして、労働は価値が考えられるものになる。



そこで、「労働 w をする自分を保つために、商品 x_1, x_2, \dots, x_k の消費が必要」は、つぎの等式の読みである：

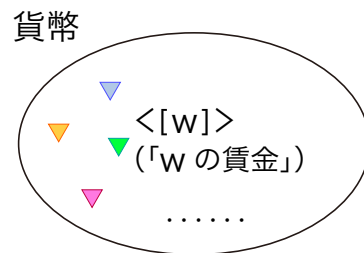
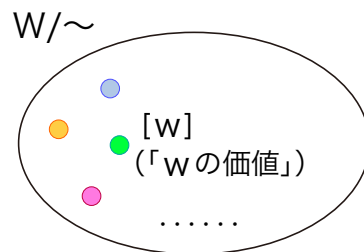
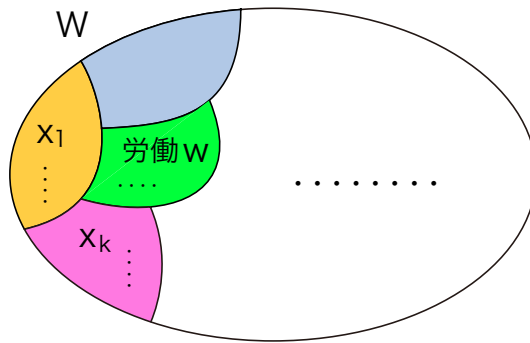
$$[w] = [x_1] + [x_2] + \dots + [x_k]$$

労働 w の価値 $[w]$ は、貨幣を記号(名前)としてもつ。

これは $\langle [w] \rangle$ と表される。

そこで、「労働 w の賃金は n 」は、つぎの等式の読みである：

$$\langle [w] \rangle = n$$



以上示した労働価値論は、実際には無理な論であり、空論である。

しかし、『資本論』はこの調子で進むものである。

一般に、物から諸概念を実体的に構成しようとする論は、この種の無理をするものになる。

実際、唯物論は、「物から諸概念を実体的に構成する」の立場を以て「唯物論」を自称しているわけである。

7.5.6 「剰余価値」

『資本論』は、商品生産に対し「価値生成」の捉え方をしようとする。それは、以下のような具合になる。

生産を、「商品 x_1, x_2, \dots, x_n に、人が労働 w を以て作用し、商品 y をつくる」で考える。

y には生産に要した経費に利益を上乗せした価格をつけることになるが、このことを「価値」の関係に解釈する：

1. 「生産に要した経費」に対する「価値」の解釈は、

$$[x_1] + [x_2] + \dots + [x_n] + [w]$$

2. 「商品 y の価格」に対する「価値」の解釈は、 $[y]$

3. そこで、「利益」に対する「価値」の解釈は、

$$[y] - ([x_1] + [x_2] + \dots + [x_n] + [w])$$

『資本論』は、 $[y] - ([x_1] + [x_2] + \dots + [x_n] + [w])$ を「剰余価値」と呼んで、つぎに「剰余価値はどこからきたのか？」という問題の立て方をする。

『資本論』は、「価値」の規範学を立てるものであり、「剰余価値」はこの規範学の内容である。特に、「剰余価値」は観念論である。

しかし、『資本論』は、「剰余価値」をリアルに立てるところにその真骨頂を見ることになるものである。

『資本論』において、「剰余価値はどこからきたのか？」はリアルな問題である。

『資本論』は、この問題に対しつぎのような答え方をつくるものである：

「労働は、特殊な価値である」

そしてこの段になると、論理を接ぐことが不可能になってくる。即ち、ここに「価値の規範学」は終わる。

なお、「剰余価値」は、搾取論（「剰余価値は資本家の搾取分——労働者は搾取されている」）につながり、そしてこの流れで、共産主義につながっていくわけである。

7.5.7 『資本論』の価値論は、無用

ここまで『資本論』の価値論を解説してきたが、解説は『資本論』が「剰余価値」を定立する段で終わる。

解説は、「商品の交換」から「価値」を構成するところまでであった。

これは、『資本論』のはじめの部分に触っただけ——残りの膨大な論考の無視——のように見えるかも知れない。

しかし、構成的論述は、論理を受けなくなったところでオシマイになるものである。「後は<無理>が続くだけ」と見切り、終わらせるものである。

そして、「商品の交換」から「価値」を構成する論は、もともと空論である。「価値の規範学」として読むのみのものである。——「数学」を読むように読むのみのものである。

柄谷行人は「命がけの飛躍、暗闇の中での跳躍」のことばで価値の実現を表現しているが、「命がけの飛躍、暗闇の中での跳躍」には「その都度」の含蓄がある。実際、「その都度」が、リアルな価値の考え方になる。

マルクスの価値の構成は、空論である。

そもそも、『資本論』の価値論は、『資本論』において無用のものである。

『資本論』は商品経済学であるが、恐慌論が商品経済学にあたる。

そして、価値論はこの商品経済学で機能していない。

「空回りしているネジ」である。

おわりに

「マルクス主義批判」というと、マルクス主義と同位対立のスタンスで、マルクス主義に負けじと原典の引用をやり、ぐちゃぐちゃした物言いを連ねるのが、ふつう見るスタイルである。そこで、一般読者としてこれを読む者は、「けっきょく同じ者どうしじゃないか」「勝手にやってなさい」になる。

本テキストは、このスタイルを退けるものである。

科学の文体がだいぶ整えられ、そしてことばのプラグマティズム（「機能してなんぼ——所期の通りに相手が受け取ってなんぼ」）といったものもだいぶ理解されてきたいまの時代、このようなスタイルは真似るものではない。

「マルクス主義の文体を退ける」、これが「マルクス主義批判」作法のいちばんである。

宮下英明 (みやした ひであき)

1949年、北海道生まれ。東京教育大学理学部数学科卒業。筑波大学博士課程数学研究科単位取得満期退学。理学修士。金沢大学教育学部助教授を経て、現在、北海道教育大学教育学部教授。数学教育が専門。

註：本論考は、つぎのサイトで継続される（この進行に応じて本書を適宜更新する）：

<http://m-ac.jp/thought/marxism/>

「マルクス主義批判」作法

2014-01-24 初版アップロード (サーバー：m-ac.jp)

2015-10-22 更新

著者・サーバ運営者 宮下英明

サーバ m-ac.jp

<http://m-ac.jp/>

m@m-ac.jp
